

アシタバ新規作付け圃場での早期収益化を目指して ～露地育苗での最適な保温資材を検討しました～			
アシタバ露地圃場において11月中旬に播種し、保温資材「ユーラックカンキ」をトンネル掛けして育苗した苗を翌年3月上旬に定植すると、保温しない場合と比べて10日程早い5月中旬から収穫でき、初期収量も約2倍増加しました。			
実施機関	三宅事業所	事業名	伊豆諸島における農業振興技術対策

(背景・ねらい)

三宅島ではアシタバ栽培を希望する新規就農者が、早期に収益を得られる栽培方法が求められていますが、慣行では11月中に播種して4月中に定植、6月末～7月初旬にかけて収穫開始となり、播種してから収穫まで長期間を要します。そこで、早期収穫開始と初期収量の増加を目標に、播種後に各種保温資材を使用して育苗し、その効果を検討しました。

(成果の内容・特徴)

- ① 資材の紹介

「ダイオベタロン」(ダイオ化成、開孔率45%)、「ユーラックカンキ」(ミカド化工、開孔率3.0%)それぞれの資材を11月19日に播種後、トンネル掛けしました。
- ② 保温・保湿効果

保温・保湿効果は「ユーラックカンキ」で大きく、資材なしと比較して気温で0～2℃、湿度で0～10%程度高くなりました。一方「ダイオベタロン」では保温・保湿効果は小さく、資材なしとほぼ同等でした(図1)。
- ③ 定植時の苗の長さ

定植に適した中～極長サイズの割合は、「ユーラックカンキ」で8割以上となり、「ダイオベタロン」や資材なしと比較して優れました(図2)。
- ④ 除草

除草回数と除草に費やす時間は、「ユーラックカンキ」で最も多くなりました。これは、資材の保温・保湿効果が雑草の生育を促進させたことが原因と考えられました(表1)。
- ⑤ 収穫開始日

収穫開始日は、資材なしが5月28日であったのに対し、「ユーラックカンキ」が10日早い5月18日、「ダイオベタロン」が約1週間遅い6月4日となりました。
- ⑥ 収量

収量は「ユーラックカンキ」で最も多くなり、特に5月、6月において顕著でした(図3、表2)。

(成果の活用と反映)

育苗時の保温資材の使用は、収穫開始を早め、初期収量を増加させます。ただし、適切な除草管理に留意する必要があります。今後は更なる早期収益化を図るため、播種時期や定植後の保温等を検討し、より現場で導入しやすい技術となるよう努めてまいります。

(赤神 沙織)

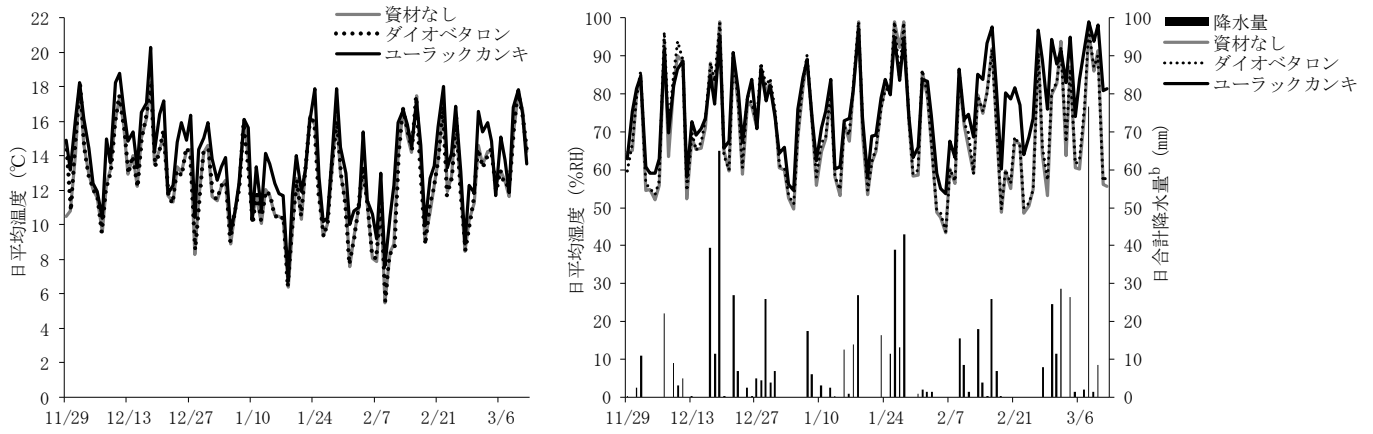


図1 育苗期間中の各試験区の温度（左）と湿度（右）の変化^a
 a) 温湿度計（おんどとり Jr、RTR-503）で11月29日から3月12日まで計測
 b) アメダス三宅坪田の記録値（2月19日から25日の期間のデータ無）

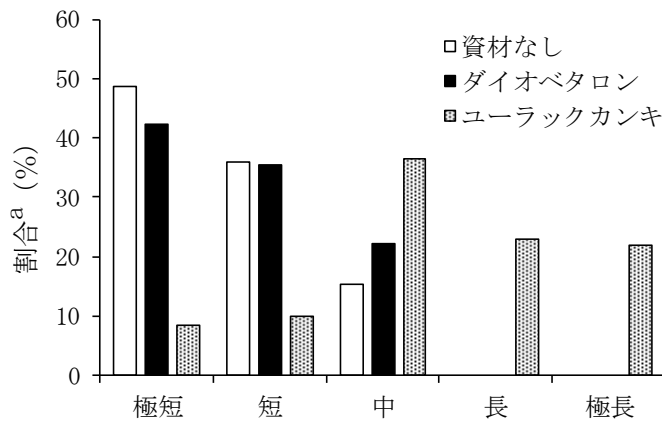


図2 定植時苗の長さの階級^bごとの割合
 a) すじまきした29列中、5列分を掘り取り地上部の長さを階級でわけ、階級ごとの割合を算出した。
 b) 極短：0～7cm 短：7～10cm 中：10～20cm 長：20～30cm 極長：30cm以上

表1 育苗期間中の除草回数と時間

試験区	除草回数	除草時間合計 ^a
資材なし	2	2時間32分
ダイオベタロン	2	4時間21分
ユーラックカンキ	3	6時間6分

a) 0.9m×4.5mの畝を1人で除草した場合

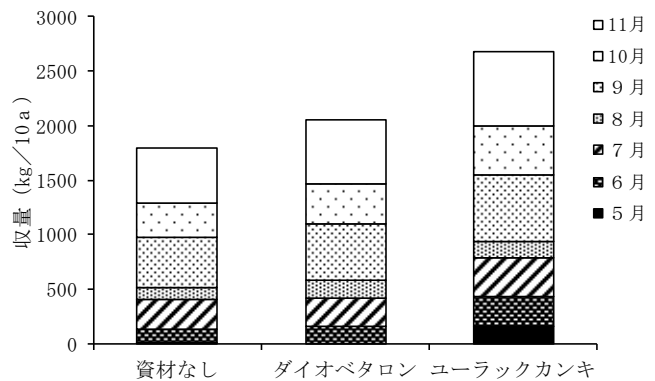


図3 収穫調整後の収量

表2 収穫時の生育調査

試験区	全体長(cm)		葉柄径(mm)		全体重(g)		調整重 ^a (g)		収穫数(本/10a)	
	5～6月 ^b	全期間 ^c	5～6月	全期間	5～6月	全期間	5～6月	全期間	5～6月	全期間
資材なし	32.7	34.2	5.8	6.2	8.8	12.2	7.9	10.6	11163	173247
ダイオベタロン	32.9	34.8	6.1	6.6	10.8	14.2	9.4	12.1	10130	172037
ユーラックカンキ	34.5	34.8	6.2	6.6	11.3	14.5	9.5	12.4	20940	197475

a) 出荷規格である30cmに調整し測定した重さ

b) 収穫開始日から6月までの期間の累計から算出した値

c) 収穫開始日から11月17日までの期間の累計から算出した値